

伏見先生と私

高橋浩一郎

伏見先生は私の先生でもあり、先輩でもある。
はじめて接触するようになったのは、私が昭和八年、旧

制の七年制の東京高等学校を卒業し、東京帝国大学の物理学科に入った頃である。伏見先生も、やはり、ジュラルミン高校といわれる東高を卒業され、東大の物理学科に入られ、私が入った年に卒業され、助手になられた。そして、物理学の演習を担当され、一年間指導を受けた。したがって先生であり、先輩であるわけである。

この年、今から思うと冷汗ものであるが、私は、科学者であり、随筆家としても有名であった寺田寅彦先生のところへ、紹介もなくおしかけ、御指導を仰いだ。そして、その夏、かつて家で行っていた砂の実験を、理化学研究所にあった、寺田研究室でさせて頂いた。そして、先生の御指導で論文にまとめ、同年の理化学研究所彙報に出して頂いた。これが、私の本格的な処女論文である。

この翌年、ふと不規則な振動から、その振動体の周期や減衰率を求める方法を思いついた。それは、現在でいう自己相関係数である。これは、寺田先生もほめて下され、昭和一〇年の理化学研究所彙報に出して頂いた。

この頃、伏見先生が私の高校の先輩であった関係もあり、しばしば部屋におしかけ、お話を伺ったり、いろいろお世話も頂いた。そして、私の思いつきにも関心をもたれ、数学的に考察され、裏打ちして下さった。これは、二篇の論文となって、中央気象台欧文彙報に出されている。

伏見先生はいくつかの著書を出されているが、その一つ

に昭和一七年に河出書房から出された『確率論及統計論』がある。戦時中のことで、紙質も悪かったが、名著である。昭和五二年に、その復刻版が出たそうである。確率論の基礎、記述統計、時系列論、物理学における揺らぎの現象、エルゴード理論、量子統計力学などの広い範囲にわたり述べられている。直接うかがったことはないが、これを書かれた動機の一つには、前述の論文があったような気がする。伏見先生は、その後阪大に移られ、原子物理学の研究に携わられた。そして、私は昭和一一年に卒業後、中央気象台に入り、気象の道に入った。この関係もあって、その後、長い間、たまにお会いするだけで、仕事の上での接触はほとんどなかった。

しかし、縁というものであろう。昭和三〇年の二月、インドのニューデリーで行われた世界気象機関のアジア地区会議に出席した折りの帰途、旅客機の中で偶然に会い、雑談で旅愁をなくされたこともあった。このようなことが起こる確率は、きわめて小さいような感じがするが、外国に行くルートは大体きまっておき、国際会議が行われる場所も、そう多くはないので、案外、ありうることである。

伏見先生は理論物理学のコースをとられ、私は実験物理学のコースをとった。それにも拘らず、伏見先生は阪大では実験もされたようであり、私は仕事の性質上、実験から遠ざかり、紙と鉛筆で仕事をするようになった。しかしながら、

その本性は変わらず、伏見先生はスマートな演繹的な仕事をされるように思われる。それに対して私は泥臭く、帰納的な仕事をする。伏見先生は、実によく外国の本もよみ、綿密に仕事をされる。私はどちらかというと、拙速である。これは、一つは伏見先生は長らく大学におられ、私は天気予報という時間に追われ、いやでも短時間に決断をせまられる環境にいたためかもしれない。

伏見先生は、昭和三十六年には、名古屋大学のブラズマ研究所長となられ、また、後には、日本学術会議の会長ともなられた。そして、現在は参議院議員である。この関係で、直接の研究からは遠ざかれたようであるが、日本の科学技術の推進のリーダーになられた。そして、広い視野に立ち、行政的、政治的面でも活躍されるようになった。

しかし、科学者の立場は変わっていない。昭和五二年には日本のエネルギー、資源を憂うる研究者の会を組織されるし、昭和五九年にはリンクス・リセウムという、研究者の集りというか、サロンを組織され、その理事長となられた。そして、私はその中の地球と生物圏未来予測部会の主査をおおせつかった。この関係で、ふたたび伏見先生との接触が深くなって来ている。

このようになったことの原因の一つには、私の側にもあったかもしれない。私は元来が気象が専門であるが、二五年ほど前から、気象だけではなく、地球全体、人類の将来

にも関心を持つようになった。一人でこつこつと人口、エネルギー、資源、環境、公害、気候変化などについて考え、資料を集めていた。そして、昭和四七年にローマ・クラブの『成長の限界』が出された折り、それに刺戟され、その翌年、毎日新聞社から『生存の限界』という本を出したことがあった。

伏見先生も、同じような考えを持っておられたようである。この問題はきわめて重要であり、日本人だけではなく、人類全体の問題である。そして、ただ科学だけの問題ではなく、経済、政治、思想、人生観にまで立ち入らなければ解決出来ない問題である。私自身は、その性格、能力から見ても、その対策を推進することはできない。

しかし、警鐘を鳴らさず、放っておけば、人類全滅にまで到る危険性を孕んでいる。三年ほど前から問題になって来ている核の冬などもその一例である。

この方面でも伏見先生のリーダーシップを期待したいと思う近頃である。

(元気象庁長官)

編集室より

第一回配本『学者の手すさび』をお届けいたします。次回配本は『数理のつみ草』で、九月中旬刊行の予定です。

訂正 第IV部所収「亡き嵯峨根さんのこと」の出典を『日本原子力学会誌』(一九六九年五月号)と訂正し、おわび申し上げます。